

開会挨拶 主催者挨拶

川口 順子
環境大臣

只今、ご紹介頂きました環境大臣の川口順子でございます。

「第4回内分泌攪乱化学物質問題に関する国際シンポジウム」の開催に当たりまして、主催者環境省を代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。

本国際シンポジウムに海外並びに全国各地からご参集いただきました科学者、産業界、NGO、行政担当者など大勢の皆様方とともに、ここつくばにおいて、人類の未来にとって重要な国際会議を開催できますことを主催者として大変嬉しく思います。

内分泌攪乱化学物質の問題は、世代を超えた深刻な影響をもたらすおそれがあることから、環境保全上の最も重要な課題の一つであります。

しかしながら、問題とされる化学物質について、内分泌攪乱作用を有するか否かを判定するための試験方法やリスク評価手法が、未確立であるなど、科学的には未解明な点が多く残されており、OECDを中心に専門家の国際的な連携の下に、試験法の考案・開発を行うべく、我が国を含む先進国で協力・分担して取り組みを進めています。

①日本におきましても、私ども環境省では、1998年に「環境ホルモン戦略計画 SPEED '98」を策定し、内分泌攪乱作用が疑われる化学物質の環境リスク評価を順次、進めています。その結果、本年8月には、「ノニルフェノール」と「トリブチルスズ」の魚類の影響に関する試験結果の報告書案を取りまとめましたが、このうち「ノニルフェノール」については、魚類に対し強い内分泌攪乱作用を有することが、ほぼ確実に判明しました。

②また、本年4月には、内分泌攪乱作用にかかる専門的調査研究を進めていくための拠点として、つくば市の国立環境研究所に、「環境ホルモン総合研究棟」が開始しました。今後、この施設を活用しつつ、科学的知見の蓄積と発信に貢献してまいりたいと考えています。

③さらに、本問題の解決には、国際的な連携・協力のもとに調査研究を進めることが重要であることから、世界の第一線において御活躍中の研究者方々の御参加の下に、平成10年度から本国際シンポジウムを開催し、科学的・専門的な立場から質の高い議論を進めていただいております。また、1999年より英国との共同研究を進めているとともに、本年4月には韓国とも共同研究に関する取極を締結したところです。

本日の公開セッションは、産業界、NGOを含め国民の皆様方に内分泌攪乱化学物質の問題についての認識を深め、身近な問題としてお考えいただけるような企画をしております。皆様方がこの問題に対する理解を一層深め、共に解決の道を探る契機になることを期待いたしております。

最後になりましたが、本シンポジウムの開催準備に多大なご協力をいただきました「環境ホルモン学会」の会員の皆様方、そしてご参加いただきました国会議員の諸先生、さらにご後援をいただきました「茨城県」、「つくば市」をはじめ、関係者の皆様方に心からお礼を申し上げまして私の御挨拶といたします。